

誰だつてなる。 多くの人がなる可能性の高い障がいです

高次脳機能障がいとは、病気や事故などで脳に損傷を負った時に起こる高次の脳の障がいのことです。記憶力や思考力の低下など、外からわかりづらいため、誤解されたり、長く社会的にも見過ごされがちでした。注目を集めるようになったのは、親の会などの運動により厚生労働省がモデル事業に認定し、支援がはじまった2001年頃からです。

医学的にも脳のどの部分を損傷すればどういった機能障がいであるかわかるようになり、損傷に合わせた支援のあり方の議論も進み、地域での支援体制づくりの取り組みも進んできました。



「脳は回復する。病院やリハビリ施設だけでなく、医療系、行政、福祉系の地域資源が連携して支援。まちの中で生活しながら回復を支える街づくりが理想」と語る慈恵医大付属第三病院リハビリテーション科の渡邊修教授(脳外科医)

フオーローの連携が進む先進的な調布市

調布市でも「連携した支援」への体制づくりが、医療、行政、福祉の関係者が一体となって進められています。

市内の関係者が集まって事例を語り合う「高次脳機能障がい事例検討会」も2回目。ここでは、それぞれの専門分野や施設から支援方法の事例が語られ、そのやり方の共有や相互のアドバイス、改善方法の検討が真剣に行われていました。

調布市は多摩地域でも先進的な地域だそう。行政や社会福祉協議会、福祉施設、家族会が一体となって障がい者を支える体制を作ってきた歴史があるからだといえます。



第3回「高次脳機能障がい事例検討会」。「ここに家族や当事者も入って支援の在り方を語り合うのが理想」と渡邊教授はいう

ちよつとまじめに考えよう！

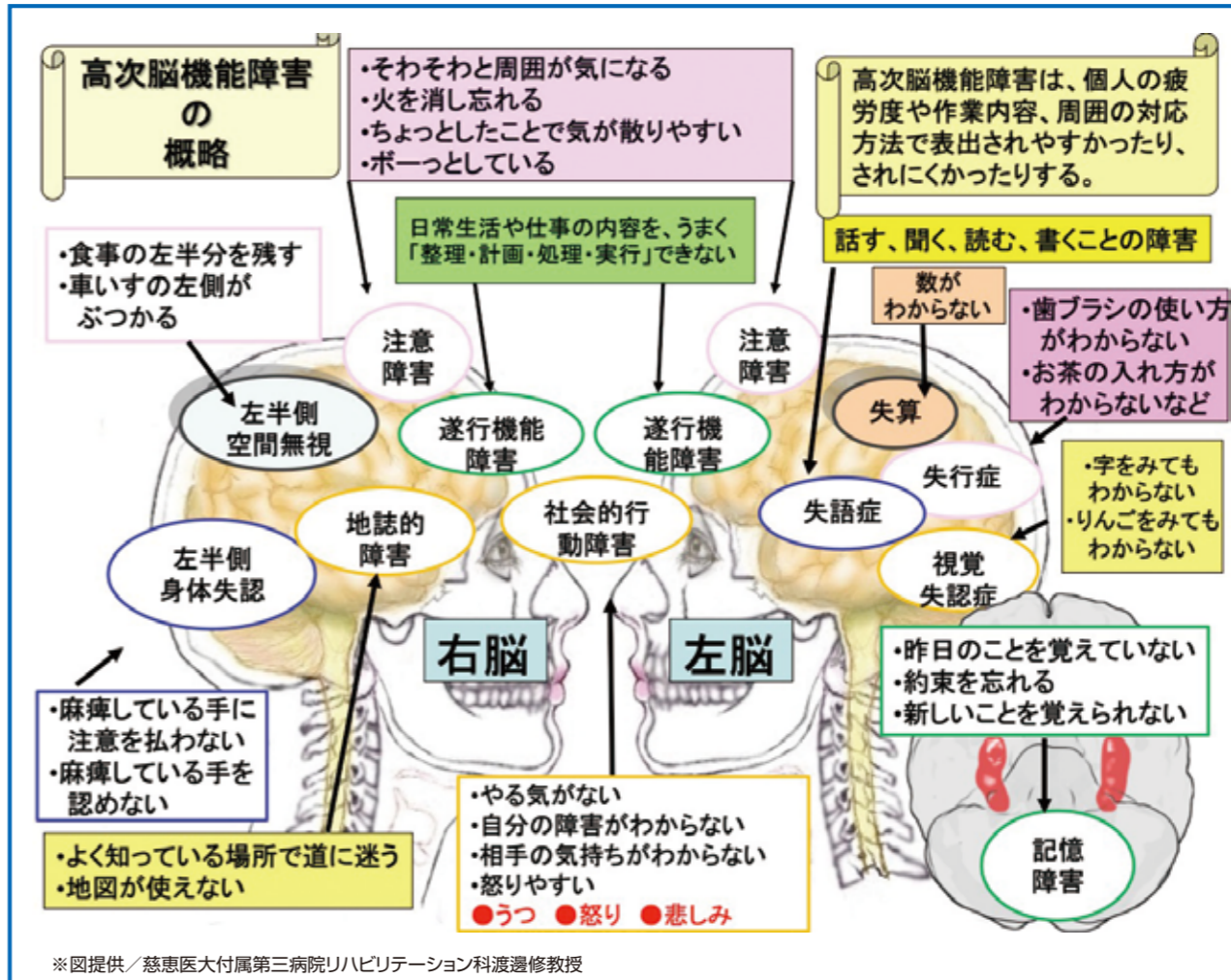
高次脳機能障がいとは？

この長い漢字の障がいのことを知っていますか？
実は誰でも後天的になる可能性の高い障がいです。
いったいどんな障がいなのか、どんな支援が行われているのか。高次脳機能障がいを巡る調布市内の状況をレポートします。

主な原因は3つ

- 脳血管障がい**
脳梗塞、脳出血などによる脳の損傷
- 外傷性脳損傷**
交通事故や転落事故などにより脳が損傷
- その他**
脳炎や、心肺停止などによる脳の酸欠などで脳が損傷

脳の損傷部位と症状の関係図



損傷の部位、程度によって出てくる症状が変わってきます。また、複数の障がいや重複して出ることも。支援では当事者の障がいを負つた経歴、人格も性格も違つたためひとりひとり独自の対応が求められます。知識に加え、対応力が問われるので、「事例研究会」のような取り組みが重要となります。

※図提供/慈恵医大付属第三病院リハビリテーション科渡邊修教授

- ### 調布市内の「高次脳機能障がい」支援団体・機関一覧
- ◎慈恵医大付属第三病院
 - ◎調布市役所障害福祉課
 - ◎調布市社会福祉協議会(ドルチェ/アイビー)
 - ◎調布くすの木作業所
 - ◎高次脳機能障がい者活動センター「調布ドリーム」
 - ◎調布市障害者地域生活・就労支援センター「ちよふだぞう」
 - ◎めじろ作業所
 - ◎調布市こころの健康支援センター 就労支援室「ライス」
 - ◎スマイルパークCHOFU
 - ◎東京リハビリ訪問介護ステーション「サテライト調布」
 - ◎NPO法人リフレッシュ工房
 - ◎NPO法人エクセルシア
 - ◎リサイクルショップ「不思議屋」

支援施設紹介

NPO法人高次脳機能障がい者活動センター 調布ドリーム

豊かな環境の中で脳は少しずつ回復する

理事長兼施設長の吉岡千鶴子さん自身が、息子さんが交通事故で高次脳機能障がい者になり、その支援のために5つもの家族会に入り勉強。苦悩の中で2002年から自主グループ「高次脳機能障がい者のつどい」を立ち上げ週3日のリハビリ活動をはじめ、2010年にNPO法人化、2011年に開所した施設。

社会に適応するためのコミュニケーション力や対応力を高めるための「集団の特性を生かしたグループ訓練」、覚えるより、自ら考える「利用者主体の支援」、「皆で一緒に分かち合う風土」を大切にサービスや空間、時間を提供しています。

「グループの持つ力は大きく、元気になっていきます」と吉岡さん。試行錯誤の15年だったといいますが、独自の数々のプログラムと支援方法を考え出し、多くの方の症状の改善や、社会復帰に寄与してきました。



手前の部屋では就労継続支援サービスを提供



「夢市」を運営



奥の部屋で生活訓練サービスを提供

■DATA/調布ドリーム 調布市飛田給2-22-7TBKビル1F
TEL&FAX042-444-3068 EMAIL:info@chofudream.com
Http://chofudream.com

インタビュー 清水博史さん(55歳)

建築会社の営業として飛びまわっていたが2013年夏、トラックにはねられ、40mもひきずられる大事故にあう。奇跡的に外科手術的治療は1カ月で済んだが、左脳にダメージを受けたため、記憶と空間認知、注意力などに障がいが出て、音も大きな音が苦手に。しばらく理由がわからず苦悩したが6カ月後に高次脳機能障がいと診断される。現在、家族の理解にも支えられ社会復帰に向けてリハビリ中。ゆつくりした口調でそれまでの生活、そして高次脳機能障がいへの思いを朴訥と語ってくださいました。

インタビュー 太田祐希さん(20歳)

2006年冬、11歳の小学5年生の時に右脳で脳出血。気が付いた時には病院で左半身が麻痺の状態だった。脳にも損傷を負い、長期記憶に障がいが出た。養護学校を卒業し、企業に勤めるもまわりに理解者がなく退社。英会話が好きで英検準2級。現在、「コミュニケーション力をつけて再度理解あるところで働きたい」と調布ドリームに通われています。

高次脳機能障がいの人との付き合い方

街で動き方やしゃべり方がごちゃごちゃな人を見たら、変な人だと思わずに、事故かな、脳梗塞などの脳の病気の後遺症なのかなと考えてください。

そして、言葉を最後まで聞いてあげてください。「わかっていないけどできない」という思いをわかってください。高次脳機能障がいになる原因の7割は、脳卒中。その中でも脳梗塞が多く、日本人で脳梗塞になるのは4〜5人に1人の確率だといわれています。誰もがなる可能性のある障がいなのです。支え合うことで回復する可能性のある障がいです。みんなに支援していきたいものです。